すみよし

２０１７　クリスマス号　第２０３号

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

聖　句

きょうダビデの町であなたがたのために

救い主がお生まれになった。

この方こそ主メシアである。

「いと高きところには栄光、神にあれ、

地には平和、御心に適う人にあれ。」

新共同訳　ルカによる福音書

２章 11 節,14 節

選：マリア・レオニア

R.K.

目次

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

≪ 巻頭言 ≫

エマニュエル　ポポン神父

　2000年前ユダという小さい王国で、イエスと呼ばれる人が生まれました。見た目では他の人と同じでした。この人が成長し、大人になり、神の国というものを宣べ伝え始めました。当時そういう人は少なくありませんでした。
その人たちもみんな見た目では、たまに変わった服を着ていましたが、普通の人に見えました。しかし、その中でイエスの名前は空間と時間を超えて私たちまで届きました。イエスに出会う人はどうして彼に関心を持つようになったのでしょうか。
間違いなくその名前が今まで残ったのは何かがあったからです。しかし、目で見えるものではなく、心が把握できるものでした。
イエスが生まれた時は目立つ者としてお生まれになりませんでした。後の生涯もあまり目立ったものではありませんでした。しかし、イエスには心の目にしか見えないものがあったのです。それは神の命の力。その力を手に入れたければ、心の目を覚ませばいいのです。それは目立たないもの、力のないものに神の命を見ることから始まります。

目次

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

目　次

☆	聖句		・・・	1
☆	巻頭言	エマニュエル神父	・・・	2
☆	目次		・・・	3
☆	待降節黙想会	エマニュエル神父	・・・	4-5
☆	高山右近列福記念講演会	S.K.	・・・	6-7
☆	追悼祈念ミサ・追悼ラファエル松本武三神父様		・・・	8-9
☆	“ふっこうのかけ橋”CAMP		・・・	10-11
☆	すみよしニュース		・・・	12-15
☆	シリロ神父様訪問記	M.T.	・・・	16-17
☆	ふれあいフィエスタ・住吉教会バザー	M.S.	・・・	18-20
☆	「すみよし」と松田明美さん		・・・	21
☆	図書コーナー		・・・	22
☆	ヤモリのヤン君とピーコの物語	T.T.	・・・	23-26
☆	（教会日誌・信徒動静）		・・・	(27)
☆	後記			28

題字　J.Y.　　表紙絵　昭和 39 年クリスマス号再掲載

「すみよし電子版」はカトリック住吉教会 HP にフルカラーで掲載されています。
左記 QR コードからのアクセスもご利用下さい。

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《 待降節　黙想会 》

指導司祭　エマニュエル　ポポン神父
2017 年 12 月 3 日（日）

待降節第１主日の 12 月 3 日、待降節黙想会が行われました。今年はいつもミサの時にお話を聞いているエマニュエル神父様の講話で、特に緊張することもなくゆっくりとお話を聞くことが出来ました。

「待降節」とは幼子キリストの誕生をただ待つのではなく、希望をもって大切な人を待ち・望むこと。

イエスとの絆、信頼のもとにお互いに大切に仕えあって豊かになり、主を待ち望む。イエスはあなたがたのもとに来て、何かよいことをもたらして下さる。

『黙想会のテーマ・神の怒りの日』

「信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなた方を愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。」（エフェソの信徒への手紙３：１７）

信じるとは私の内に主イエス・キリストを喜びをもって迎え入れ、またすべての人にとっても信じることによって幸せであり、よい事がもたらされるようにと願うことです。

去る 9 月 17 日・年間第２４主日のマタイによる福音（１８：２１～３５）には「借金を返さない仲間の首を絞めた家来を許さず、怒ってその家来を牢役人に引き渡した」という主君＝神の姿が書かれています。
待降節が近づいているこの時期になぜこのような恐ろしい存在としての神の姿を伝えるのかと「違和感を覚えた」と神父様は話されました。クリスマスは弱くやさしい幼子イエスの誕生を祝う日です。

「主の大いなる日は近づいている。きわめて速やかに近づいている。聞け、主の日にあがる声を。
その日は勇士も苦しみの叫びをあげる。その日は憤りの日。苦しみと悩みの日。荒廃と滅亡の日。
闇と暗黒の日。雲と濃霧の日である。（ゼファニア１：１４～１５）

神の最後の審判で正しい者は報われ、悪い者は滅ぼされるという恐ろしい審判。怒りと恐ろしさを描くことは、誠実な人生を送ったイエスの生涯、生き方を伝えるのに矛盾していないでしょうか？
　みんなで一緒に考えましょう。
聖書の中で神の姿が脅迫的な存在として描かれている箇所は多い。神の怒りは不正を行う人に対して不正を正し、弱い者を守るため。

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

「寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。もしあなたが彼を苦しめ、彼が私に向かって叫ぶ場合は、私は必ずその叫びを聞く。私の怒りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。」（出エジプト２２：２１）

神は正義の味方、弱い者の力、最後の希望。神は畏れるべき存在ではなく、正義の味方、友達と思いたい。　でもまだ少し違和感が残る。

神の怒りとは？　以下のように説明されている箇所がある。

「ああ、エフライムよ　お前を見捨てることができようか。・・・・わたしはもはや怒りに燃えることなく、エフライムを再び滅ぼすことはしない。**わたしは神であり、人間ではない**。お前たちのうちにあって聖なる者。怒りをもって臨みはしない。」（ホセア１１：８～９）

　私たちはどのような神を信じたらよいのか？
神の怒りは回心することを願っている。福音書を読むときに、イエスの生き方、特に死に方（十字架の死）について考えたい。
私たちは神の真意をとらえずに神を畏れ、そのように人に伝える。
神は我が子を赤ちゃんとして人間にゆだねた。その子は自分を十字架にかけて殺した人のために神に赦しを請い、怒りではなく、慈しみと愛をもって人生を歩んだ。

　神を信じるとは、神からくる救いを信じること。神の愛から離れずに愛の内にとどまり、畏れるべき存在としてではなく、神の慈しみの中で過ごす。
闇を優先せず光を優先して自由に生きよう。

　自由に生きるとは？
クリスマスを前に、マリアと共にいる赤ちゃんを想像しましょう。
赤ちゃんを迎え入れるために、どんな人になればいいのか？　どんな人を目指せばいいのか？　私が幼子を受け入れるのにふさわしい場所となるためには？と考える。
まずは自分自身のまわりにいる兄弟姉妹を受け入れ、畏れを持つのではなく、人の愛、人の喜びが私のうちにとどまれるようにすれば、幼いイエスを迎え入れるのにふさわい場所を用意することが出来るのではないでしょうか。

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなた方の広い心が、すべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも思い煩うのはやめなさい。
何事につけ感謝を込めて祈りと願いを捧げ、求めているものを神に打ち明けなさい。
そうすればあらゆる人知を超える神の平和が、あなた方の心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」（フィリピの信徒への手紙　４：４～７　）

目次
Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《　高山右近列福記念講演会 》

S.K.

川村 信三神父

9 月 16 日、六甲教会で高山右近の列福を記念して上智大学文学部教授の川村信三神父の講演会が開かれました。戦国時代当時の時間と空間に立ち返って、歴史学とキリスト教の観点を合わせて高山右近の人物史を見直すとの趣旨で説き起こされました。和辻哲郎の「鎖国」にキリシタン時代に文化交流がいかに進んだか書かれていることを指摘。引きつづき右近を理解するため 7 つの質問に答える形で講演は進められました。講演と質疑応答要旨は以下の通りです。

7 つの質問

1．　右近は謀反人か　…　親子で高槻城を乗っ取ったのは事実。当時高山親子は富田の芥川城にいた。領民は高山親子を慕っていた。荒木村重の指示で高槻城主の和田惟長の謀反を調べに行き、追い出したとの説がある。

2．　右近は不忠義者か　…　右近の直属上司である荒木村重が信長に謀反を起こしたとき、信長は右近に問うている：荒木につくか（そうなればキリシタン領民を皆殺しにされる）、信長につくか。→　右近の答えは、ここで死ぬという第 3 の道。信長が折れて、戦略的に重要地点である高槻を絶対ものにするために右近を受け入れた。

3．　右近の残したものは　…　このころ本当の信仰者となった。多数のキリシタン改宗、貧民の葬儀行列をみずから行った。信長の許しを得て安土にセミナリオを作った。1580 年ごろは右近にとっても高槻にとっても最盛期。

4．　右近は敗走者か　…　光秀の謀反の後、山崎の戦いでは援軍を得て最前線で大勝利。1583 年賤ケ岳の戦いでも最前線にいたが、このときは援軍が来なかったのでいったん陣地を立て直すために後退。江戸時代にキリシタン嫌いの人からこのことを臆病者、敗走者と言われたが、戦略上当然のことでこの批判は当たらない。その証拠に、この後、キリシタン大名黒田官兵衛など多くの仲間が増えた。しかもそれは茶の湯の友でもあった。

5．　右近は信仰者か　…　信仰者、実践者で証聖者であった。秀吉のバテレン追放令の 2 年前、高槻から明石に移された。4 万石から 6 万石に加増されたが、秀吉はキリシタンの増加を警戒して右近を領民から切り離すことが目的だった。秀吉と右近は目指す世界が違った。右近はバテレン追放令を予想していた。

6．　右近は祈りの人か　…　右近は生涯 2 回霊操を行っている。8 日間の簡略版ではなく、30 日間の正式版。生涯すべての罪の赦しを請う総告解をしてから。イエズス会修練者と同じことをしようとした霊操の人。

7．　右近は殉教者か　…　70 年ほど前に右近を証聖者（生涯を全うした）として列福しようとしてうまく行かなかった。（エドワード王が証聖者として列聖されている例がある。）証聖者としては血なまぐさかった。殉教の定義は、　①死ぬこと、②目的はキリストのために、③無抵抗であること、で奇跡はいらない。右近は 1615 年、信仰のために、ルソンまで 100 人乗りの船に 350 人詰め込まれて劣悪な環境で病を得てマニラに着いてすぐに亡くなった。信仰の義のために間接的な死の原因を作られた。これが殉教と認められた。

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

まとめ

1587 年のバテレン追放令から右近が死ぬまで 30 年、生涯の半分を金沢で過ごした。この期間が現代のわれわれには重要となる。能登に四千石をもらい、300 人の信徒が増えた。右近は茶室で祈っている。右近の霊性は茶室の中にある。右近の霊性の中にお茶の中にある日本人の自然の心と、自然の中にさしてくる超自然の神の心が両方一緒になっていたのではないかという気がする。すべての中に神を見る。これはイグナチオの霊性。

ラジオ番組(注)でも述べたが、異文化との交流で発見するのは文化の違いではなく自分自身である。

（注）2017.8.24 NHK ラジオ深夜便

質疑応答から

・石高とはどれくらい　…　石高はすべてコメで数えるわけではない。それでどれだけ軍事支出が供出出来るかということ。石高より高槻という位置が大事であった。秀吉はキリシタンがあまりにも増えることが為政者の不安であったはず。

・なぜ列福が遅れたか　…　証聖者にしようとすると奇跡がいる、殉教者なら奇跡はいらない。この 5 年間の列福申請におけるアプローチが効を奏した。

・高山親子洗礼のいきさつ　…　右近の父は松永久秀に仕えて奈良県の澤城を持った。松永久秀の家臣の結城忠正がキリシタンだった。宣教師のビリラに教えを聞いた。高山家はもともと一向宗（浄土真宗）であった。

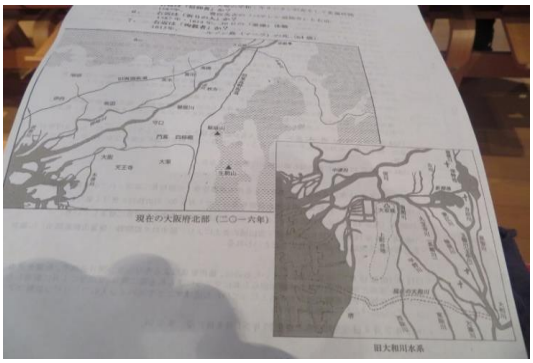
・茶道の所作と教会の所作が似ている　…　似ているが証拠はない。1580 年ヴァリニャーノが日本人を理解するためには茶の湯に親しめと書いているが、所作の似ていることの言及がない。偶然に似てきたとしか言えない。一方、千利休がキリシタンであったという説がある。

・高山右近が日本人とキリスト教の間にメンタルなギャップがあったかどうか　…　毎日のようにあったはず。血で血を洗う戦国の世だから。

・霊性と現実を生きた右近は現在にも通じると思うが　…　100%同意する。聖人福者は例外中の例外で自分には出来ないことをやって私たちに希望を持たせる人。

・金沢に潜伏キリシタンが残らなかった理由は　…　長崎外海五島では①組織、②期待、③コンチリさんの利やく（秘跡）があった。中でも秘跡の記憶を持っていたから。金沢にはそれがなかった。赦されて安心したという記憶。「沈黙」に出てくる私と神の信仰ではいけない。教会という存在、秘跡がないといけないと言うのがカトリックの教え。

・右近の死に物狂いの信仰の原動力は　…　私も教えてほしい。分かったようなことは言いたくない。私たちが生涯をかけて示したい。信仰には御父、御母に信頼する、ゆだねる、おまかせする開き直りが一番大事だと思う。



当時の地図を記した資料

講演会場

目次

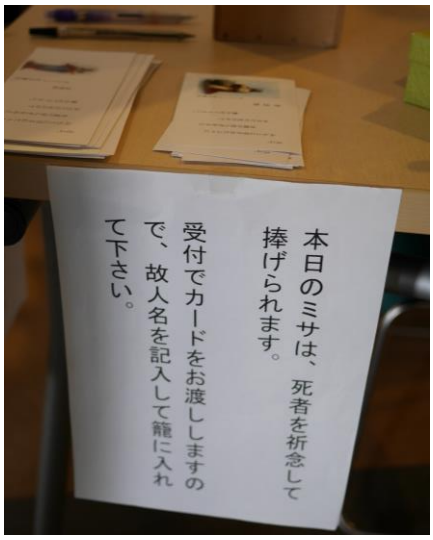
Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《追悼祈念ミサ》

2017.11.5(日)

11 月 2 日「死者の日」の後の主日である 11 月 5 日、住吉教会では、エマニュエル神父様司式で「追悼祈念ミサ」が捧げられました。

共同祈願では、この 1 年間に帰天された住吉教会の 11 人の方のお名前と、松本武三神父様のお名前が読み上げられ、皆様の在りし日の穏やかなお顔を偲びながら祈りました。



≪天に一人を増しぬ≫

家には一人を減じたり　楽しき団欒(まどひ)は破れたり

愛する顔平常(いつも)の席に見えぬぞ悲しき

さばれ天に一人を増しぬ　清められ救はれ全うせられしもの一人を

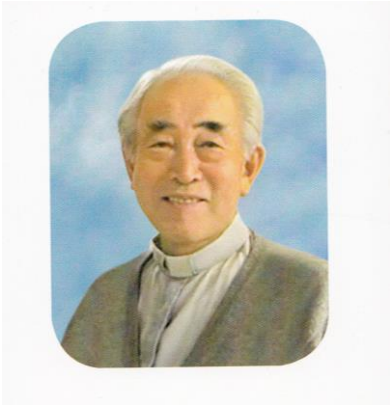
“One less at home”　S.G.ストック　作

植村正久牧師　訳

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《追悼　　ラファエル　松本武三神父様》

2017 年 10 月 24 日　帰天・74 才



松本武三神父様は住吉教会では 1977 年～1980 年助任、1985 年～1988 年主任司祭として司牧の任にあたられました。当時 42 才の若くて背が高くとてもダンディーな神父様でした。その上誰とでも気さくにお話されるやさしい神父様だったので、信徒の誰からも愛される存在でした。

大勢の方が信仰講座に参加され、1987 年 4 月 19 日の復活祭には 11 人の方々が洗礼のお恵みにあずかりました。信仰講座のお話のときなど、神父様が答えに窮されるのを分かりながら質問する意地の悪いおばさん信者にもイヤな顔もなさらずにまじめに答えて下さったのを懐かしく思い出します。

パイプたばこが大好きで、今ほど禁煙がやかましく言われなかった当時はいろいろな種類の葉たばこを形の変わったパイプにつめて楽しんでおられました。
絵の才能にも恵まれて、あちこちの教会や風景、マリア像のスケッチなどたくさんの作品を残されました。教誨師としてのお働きと共に、ラジオ朝日の日曜早朝「信仰の時間」にもスタッフの一人として参加され、一般の人たちへの布教にも熱心に取り組まれました。10 月 29 日（日）に放送された最後の講話は生前に録音されたもので、「出エジプト記」のモーセ、「列王記」のエリヤを通しての信仰の在り方と共に、20 才で洗礼を受けたことなどご自分のことを振り返り話されました。終わりに必ず「聖歌をお捧げしましょう」と歌われましたが、これが最後と思うと胸のつまる思いがいたしました。

神父様が神様のもとでやすらかに憩われますことを心からの感謝と共にお祈りいたします。　　（編集部）

松本神父様のスケッチと文章

目次

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《“ふっこうのかけ橋”ＣＡＭＰ》

８月３日(木)～７日(月)、６年目となる“ふっこうのかけ橋”ＣＡＭＰが行われました。今年は福島市と初参加の南相馬市から元気な子供達（小学生 12 名・中学生２名）とお母様（5 名）と幼児（２名）が来てくださいました。
皆様のお祈り、募金、食事・宿泊のお世話等、多くの温かいご支援に心から感謝いたします！

＜1 日目＞
ハーブ園にロープウェイで登ってランチをいただき、園内を散策。
宿泊先の住吉教会で、信者の方々の心のこもった手作りのごちそうに舌鼓♪
銭湯で汗と疲れを流してぐっすりと寝ました。

＜２日目＞
北須磨教会に移動して合同でＣＡＭＰ。アジュール舞子では海水浴や砂遊び、スイカ割りをして楽しい時間を過ごしました。途中激しいスコールにあい、敷いていたブルーシートで雨宿りしましたが皆びしょ濡れに！銭湯に行って、夜はカレーを食べ、花火をして楽しい一日を過ごしました。

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

＜３日目＞

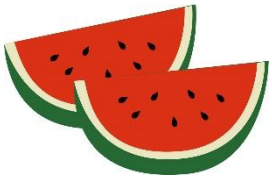
神戸中央教会に神戸地区の教会学校の子供たちが集まり、午前は近くのモスク、ジャイナ教寺院、北野天満宮、バプテスト教会、神戸ハリスト教会を巡るウォークラリー。午後は平和旬間行事「鶴に載って」のＤＶＤを観て、カードに感想とお祈りを書いてミサで奉納しました。その後「ふれあい祭り」で楽しいひと時を過ごしました。

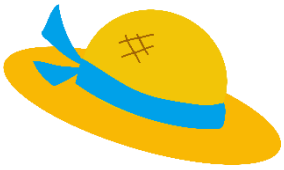
＜４日目＞

北須磨教会のミサに与った後、おいしいバーベキューをいただきました。
お掃除をして、ビンゴゲーム、最後に皆で握手をして、北須磨ＣＡＭＰが無事終了しました。
福島の子供たちは宿泊地のたかとり教会に移動して、お祭りを楽しみ、銭湯に行きました。

＜５日目＞

たかとり教会で感謝の祈りを捧げました。台風接近のため全ての行事を中止にして、飛行機は欠航のため、皆が一緒に新幹線で帰路に着きました。仲良しになって、あっという間の楽しい 5 日間でした。名残惜しいけれど来年もまた会えることを楽しみに！





目次

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《すみよしニュース》

♪バーベキューパーティー

8 月２７日（日）晴天の下、住吉教会恒例のバーベキューパーティーが開催されました。
傘木神父様のお祈りの後、実行委員長の乾杯の発声でパーティーが始まり、楽しいひとときを皆で過ごしました。準備から後片付けまで、皆で協力することで親睦もより深まったパーティーでした。

神父様のお祈りで始まります

大活躍のシェフの皆さん

お話も弾んで和気あいあいの会場

全員でハイチーズ！！

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

♪敬老のお祝い

９月１７日（日）ミサの中で人生の節目を迎える方々がエマニュエル神父から祝福をいただきました。神父様のお言葉と祝福、そして代表の方々の感謝の言葉、ミサ後の「高山右近」列福記念ビデオの上映に続く茶話会で和やかなひと時を過ごしました。

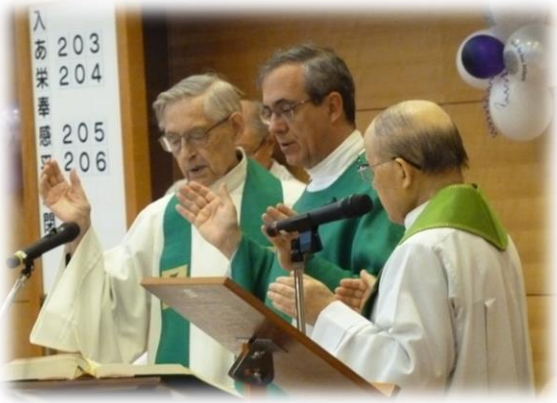
♪傘木神父様米寿のお祝い

１０月６日(日)は傘木神父様の８８才のお誕生日でした。
初金ミサ後、ミサに与った皆でささやかではありましたが和やかに８８のローソクに灯をともしたバースデーケーキを囲んでお祝いを致しました。

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

♪セニョール・デ・ロス・ミラグロス　奇跡の主

１０月２２日(日)、恒例のセ・ニョール・デ・ロス・ミラグロス が行われました。
大型台風２１号の影響で朝から悪天候でしたが 多数のペルーのお客様が来られました。
ラモス神父（オプス・デイ）・傘木神父・ペンケレシ神父司式でのバイリンガルミサの後、祝別された神輿は時間を追って酷くなる雨のため、出会いの広場のみでの行列でしたが、今年で２６年になる住吉でのこの日、大切な一日を遠い日本で一緒に祝うために集われたペルーの方々の上に主の愛が豊かに注がれますように。



お神輿の行列の後は華やかな民族衣装でのダンスや歌、そして
ペルーのお菓子や料理が販売されました。

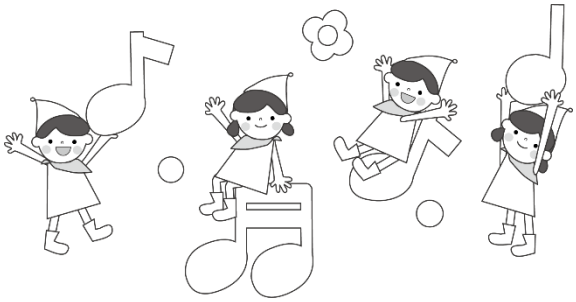
Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

♪七五三の祝福

11 月 19 日(日)秋晴れのさわやかな日、ミサの中で４名の子供たちの七五三のお祝いがありました。ペンケレシ神父から祝福と十字架と千歳飴とをいただいた子供たちの可愛い感謝の祈りに皆さんも温かいまなざしを注いでいらっしゃいました。ご家族の深い愛のもと、教会の皆さまにも見守られて育つ子供たちに主の限りない愛がそそがれますように

子どもの祈り

神さま、私たちは、お父さま、お母さまのおかげで七五三のお祝いをすることができました。ありがとうございます。これからも元気なよい子になって、神さまをよろこばせることができますように、おまもりください。



目次

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《シリロ神父様訪問記》

マリア・マグダレナ　M.T.

♫ スペイン バルセロナから一路シリロ神父様　お暮しのパンプローナへ ♫

9 月 8 日　金曜日

特急列車で 3 時間半。

お迎え下さった一瞬、見つめ合い同時に名前を呼びあった喜び。神に感謝！！

さてそれからは２泊３日間、中身の濃い時間が用意されていました。パンプローナ。中心の町は７月７日の牛追い祭りで有名な市庁舎からサンタマリアカテドラルまで賑やかな坂道を歩き、夕方の御ミサを神父様と並んで与りました。お上手な聖歌隊に驚きました。

カテドラルへの道で

神父様のお住まいは、カテドラルより歩いて２０分程の神学校で月５００ユーロで三度の食事・掃除・洗濯　全てやってくれるし部屋は広いよ～と。昼食は２時、夕食は８時だそうです。

９月９日　土曜日

朝９時に迎えに来て下さり、まずフランシスコ・ザビエル城に車を走らせました。

洗礼堂、屋上の眺めの素晴らしいこと。受付での神父様は顔パスです。

アソース村の御聖堂

ザビエル城と洗礼堂内部

馴染みのお店でランチを取りいよいよ神父様の生まれ故郷アソース村の御聖堂のカギを開けて下さいました。足を踏み入れた瞬間、感動で胸が震えました。３００年以上前の石造りの小さな聖堂でした。どんな小さな村にも必ず教会があり、ミサを挙げにいらっしゃるとか。

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

近くの御親戚のお宅２軒に立ち寄り、ひまわり・大麦・小麦で生計を立てておいでの広大な畑を屋上から見せて下さいました。のどかで美しい眺めでした！！
御兄弟・姉妹１０人で３人亡くなり、２人シスターになり、８８歳のお姉さまもおられ、２歳上のお兄様は明日バースデイのお祝いとのことでした。

そしてご自慢の神父様の畑へと。
神学校の空いた土地を利用し、野菜畑といろんな種類の果物の木を４０本植えたと見せて下さいました。トマトをちぎって食べていいよ～と。美味しい！！
子供の頃、食べた味でした。

障害者の方も働き、収穫は町に売りにいくそうです。素晴らしい生活と健康、歩くテンポも速くて追い越せません。

ご自慢の畑と立派に実ったトマト

町まで徒歩で戻り、大きな教会２か所を案内して下さいました。
聖堂内でヤーヤーと楽しそうに話しておられます。
ここの主任司祭だよ～と。

アルタナース村でシリロ神父様御ミサに与る

９月１０日
いよいよアルタナース村でシリロ神父様の御ミサに与れます。
小高い丘の眺めが最高な教会でした。オルガンも無い、聖歌隊もいない、でもあったかい。
家族の集いのような感謝の祭儀でした。アレルヤ―アレルヤ―アレルヤ　耳馴れたメロディー。神父様の唄う声が　嬉しくて、有難くて、感謝の一言です！！

Ｙチャンは（娘）どうして祝福だけなの・・・。
聖書をたくさん読んで、又、来年いらっしゃい。
私が洗礼を授けてあげるよ、これからずっと祈ってるよと。
［✚約束が叶うよう、神様、娘の首根っこを掴んで下さい！！］

ユーモラスで包み込むような愛。神様の愛を感じました。
明日からサンセバスチャン・ビルバオ・ローマを経て帰路につく娘との二人旅。
神のお恵みを沢山戴いた祈りの旅でした。

目次

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《ふれあいフィエスタ・住吉教会バザー　ご報告》

M.S.

２０１７年１１月１２日、今年も恒例のバザーを開催することができました。心配の種であったお天気ですが、さわやかな秋晴れに恵まれ、近隣や星の園幼稚園への呼びかけの甲斐もあってか、ごミサの後１１時から午後２時まで、たくさんの方にご来場頂きました。

今年は、例年あった食事メニューを一部変更し、新たに豚汁、おにぎり、唐揚げ、ホットドッグを販売しました。社会活動チームの炊き出し活動で培われたチームワークによって作られたおにぎりと、具も愛情もたっぷりの豚汁は大変ご好評を頂き、食券の売れ行きも No.1 でした。住吉バザー名物の一つでもある焼き鳥のピンチヒッターとして今年は唐揚げを販売して頂きましたが、こちらも老若男女幅広くお召し上がり頂けたようです。ホットドッグも、青年・学生を中心に頑張って頂き、用意していた１００食を完売できました。

恒例の、スペイン語ミサグループによるペルー風チキンライスとターキーサンド、芦屋 竹園のコロッケ、ぜんざいも、変わらぬ人気ぶりでした。喫茶コーナーは、教会学校の保護者の方々にお手伝い頂くのも定着し、毎回楽しんでご参加して下さっているのもうれしく思っています。また、手作りの焼き菓子も年々バラエティー豊富になり、たくさんのケーキやクッキーを前に迷われている姿を何度も目にし、私も全部食べられたらと思いつつ眺めていました。教会学校のリーダー方には綿菓子に初挑戦して頂き、輪なげとビンゴ大会は中高生メンバーが主体となって、大いに盛り上げて頂きました。

シナピスより福島県南相馬の方々による手芸品と、移住外国人支援のためのビーズアクセサリーの販売をして頂きました。この機会にその活動を知ることができたことと、それらを買って、身に着けたりプレゼントしたりすることで思いをつなぐことができたのではと感じています。リサイクル衣料、手芸・雑貨コーナーにも、たくさんの方々にご協力頂いて素敵な品物が集まり、それぞれが新天地へと旅立っていきました。インド雑貨、女子パウロ会にもご出店頂き、皆さまにお買い物を楽しんで頂くことができました。

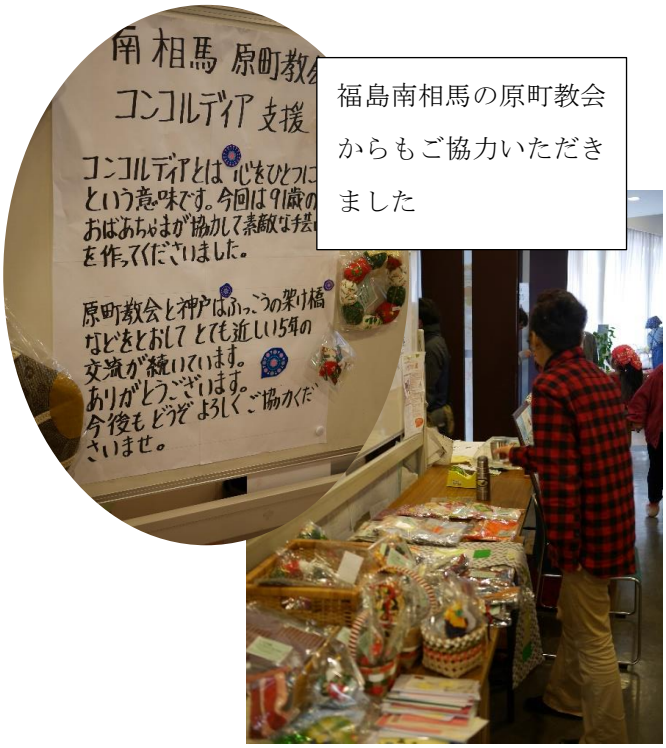
これら全１５ブースにそれぞれお手伝い頂きました方々に、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。初めてのことばかりで、行き届かない点が多々あったかと思いますが、皆さまのお力により無事終えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

商品の仕分けと値段付け、仕入れや調理、販売等、本当にたくさんの手をお借りしなければ開催することはできませんでしたし、こうして年に一度住吉教会みんなで一丸となって作り上げるバザーが、私は子供の頃から大好きです。その年に応じて形を変えてでも、教会と星の園幼稚園、そして地域に根差したこの場所で、これからも行うことができればと願っています。

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

チケット販売の皆さん
素敵な笑顔でお出迎え

リサイクル衣服・雑貨コーナーは今年も朝から大盛況



福島南相馬の原町教会
からもご協力いただき
ました

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

豚汁はいかがでしたでしょうか

今年はキッチンに男性参加率高し(^^ｖ)
小野浜の炊き出しに参加してくださる社会活動チームメンバーです！！

ペルー料理
ターキーサンドも

熱っ！♨ 握り隊

唐揚げも大好評
大急ぎで温めます

次の数字は何かな？

ビンゴ大会！！
子供たちはかぶりつきで数字の発表を待ちます。

喫茶コーナーには手作りケーキも

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《 「すみよし」と松田明美さん 》(2017.9.20　帰天)

阪神淡路大震災後からワープロ・パソコンなどの機器の発達により「すみよし」の原稿作成、印刷、製本は自分たちの手でするようになりましたが、それまでは信徒の方の医院、お店、会社、そして地域の商店から頂く広告料で外部に印刷を依頼していました。その広告を頂く仕事、印刷発注 etc を骨身惜しまずして下さっていたのが K.K.さんと松田さんでした。
浅井敏正編集長の帰天後はこのお二人が中心となって「すみよし」を震災後の混乱の中も発行し今の編集部につないでくださいました。

松田さんが編集長時代の 1996 年のクリスマス号（141 号）に掲載されているご自身の入信の記から（受洗は 15 才、霊名はカタリナ）・・・中略・・・「ロザリオに手がふれた時なぜか私は洗礼を受けようという思いが沸き上がってきました。それは自分でもなぜかわからない不思議な感情でした。あれから 50 年もたっているのに、はっきりとあの日のことを思い出すことが出来ます。・・・・信仰上の波風が立つこともありましたが、ともかく 50 年間神様の枝につながっていられるのは、教会の皆さんのおかげであることも勿論ですが、やはり信仰を持てるのは神様からの恵みであるとしみじみ感じることがあります。これからの人生、どんな波風が来るかわかりませんが、すべてを神のみ旨のままに、と祈りゆだねて生きていけることを幸せと思っているのです。」

元気印の旗を振って「すみよし」以外にも洋裁のプロの腕を生かしてミサの侍者服の縫製を助けて頂きましたし、聖歌隊ではアルトのパートを熱心に練習なさいました。何よりも人を楽しませるのが大好きという性格で新年会とか敬老の日のお祝いの余興では練習なさった皿回しとか南京玉すだれを披露してくださりエンターテイナーでした。
ところがある日　松田さんに人生の波風の日が来ました。腎臓を悪くなさり人工透析になりました。でもまだ少しお元気なころには、『日本２６聖人殉教劇』の脚本を書いて、教会の皆さんの出演で（赤波江神父様は神様のお役）上演されました。演じるほうも見る側も気持ちが一つになった殉教劇でよい思い出を作ってくださいました。
最後の何年かはお会いできなくなり「すみよし」はお送りして見て頂くだけになりました。感想を伺いたかったですね。お体はお辛い日々だったと思いますが　神様に祈りゆだねて、 お葬式はご本人の希望通り住吉教会で、ご自分の葬儀の時にと用意された華やかな打掛をまとい、色とりどりのお花に囲まれて旅立てるようにして下さった３人のお子さん方に恵まれてお幸せだったと思います。

（編集部）

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved
目次

《 図書コーナー 》

烏賊墨（いかすみ）の　一筋垂れて　冬の弥撒（みさ）

万葉神父の日々これ好日　　前田　万葉　　かまくら春秋社

この本は上智学院の高祖敏明神父と共に「潜伏キリシタン図譜」の記録誌刊行に取り組んでおられる伊藤玄二郎氏が、偶然あるカトリックの機関紙の中に、若き前田神父が早朝のミサを知らせる寄せ鐘であわてて烏賊漁から戻られた句を見つけられて心打たれ、ご本人に許可を得てこれまでの資料を集め編集されました。大司教は、五島列島での凄まじい弾圧で殉教されたご先祖方から受け継がれた前田家の信仰が、遺産として今の自分に力を与えてくれていると言われています。

「なぜ信者にしたのか」「なぜ神学校にやったのか」「みんなにはやしたてられるから万葉という名は好かん！」と親に文句を言っておられた子供の頃。叔父にあたられる前田朴神父とお父上が名付けられた万葉という名は、今は大変気に入っておられるとの事。「そのまま俳号になるから一緒に俳句を作りましょう」と信徒の方に誘われて始められ、川添猛神父様（俳号=岳石）にもご指導を仰がれながら、今では福音を五七五で表現されるのが常となられた俳句。書中の「万葉神父の五七五便り」「講演録」「対談録」にも福音句がちりばめられ、心を打つやさしい文章と共に宣教に溢れています。

「ビュルガー病　タバコ一本　指一本　名句の如し禁煙告辞」・・・思わず笑いました。酷い病を告げられ、毎日50本吸い続けられた煙草を、15年目の司祭叙階記念日に**「三月や　叙階記念日　煙草断つ」**の句と共にきっぱりと。 そんな日々もおありになったのだと親近感を覚えました。
みなさんも手に取ってお読み下さい。心にほっこりとしたプレゼントをいただけます。

あたりまえ

あたりまえ　こんなにすばらしいことを、　みんなは　なぜよろこばないのでしょう
あたりまえであることを

お父さんがいる、 お母さんがいる　　手が 2 本あって、 足が二本ある
行きたいところへ　自分で歩いていける　　手をのばせば　　なんでもとれる
音がきこえて　声がでる　　こんなしあわせなことが　あるのでしょうか
しかし、 だれもそれをよろこばない　　あたりまえだ、 と笑ってすます。

食事が　たべられ　　夜になるとちゃんと眠れ、そして又朝がくる
空気を　胸いっぱいにすえる　笑える、　泣ける、　叫ぶこともできる　　走りまわれる
みんな　あたりまえのこと　　こんなすばらしいことを　みんな決してよろこばない

そのありがたさを　知っているのは、　それを失った人たちだけ
なぜでしょう　　あたりまえ

（32 才の若さで妻と 1 才の娘、おなかの子を残して、がんで亡くなった医師　井村和清さんが書いた詩。　　ある日のお説教から）

「ありがたく　命生きよと　クリスマス」　　「青年よ　イテミサエスト　秋の声」

目次

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

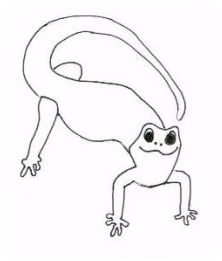
ご紹介

住吉教会信徒の T.T.さんが自作の童話（お孫さんのために書かれたもの）を投稿してくださいました。T さんが長期間技術指導をなさるために滞在なさったミャンマーでの生活体験から生まれた童話です。

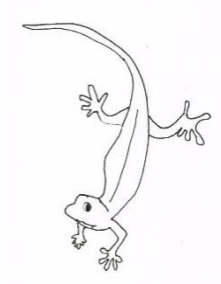
≪ヤモリのヤン君とピーコの物語≫

T.T.

これはミャンマーの首都ネピドーと云うところでのお話です。日本から遠く離れた所で、南の方へ飛行機に乗って、七時間くらいかかってようやく着きます。そこは自然が豊かで、あたり一面は美しい緑の木や草におおわれ、そこに赤や黄色、ピンクや白のきれいな花がいっぱい咲いています。首都と言っても、東京のようにいっぱい人がいるのではなく、コンクリートで出来た広い道路を、たまに車が通るくらいで、ときどき牛が５，６頭、自分達だけでゆうゆうとその道路の上を歩いていたり、時にはヤギの群れが１５，６匹、道路のわきで草を食べたり、道路を横切ったりします。



ピーコ



ヤ　ン

そんな中に、ひときわ大きな建物がポツリ、ポツリと緑の中に建っているところがあります。それらはホテルの建物で、おもに外国からミャンマーに仕事に来た人たちが長く泊まっているところです。ホテルには広い庭があり、赤やピンクのブーゲンビリアの花が美しく咲き、たえず小鳥が幸せそうにさえずっています。

また、地面には前足が長くて後ろ足の短い、変わった姿をした小さなトカゲやリスたちが芝生の上を走り回り、時には渡り廊下といって、建物と建物を結ぶ、窓や戸の無い、屋根だけの廊下の中を走っています。

そんなホテルの中に三日前からある日本人が泊まっていました。彼はこの美しい庭や小鳥のさえずり、また清潔な部屋が大変気に入っていましたが、一つだけ気になることがありました。それはそのホテルの部屋には、ヤモリと言って、日本にもよく居ますが、トカゲに似た、また大きさもトカゲくらいの動物が住み、夜中にキュキュキュキュキューと鳴くことでした。ヤモリは特に悪いことをするわけではなく、むしろ害虫を食べてくれるので、日本の田舎では人間とヤモリとは仲良く一緒に住んでいます。ただ見たところ少し気持ちの悪い姿をしていて、色も茶色がかった灰色をしているのできれいではなく、都会に住んでいてヤモリに慣れていない人は、気持ち悪がったり、何か悪いことをするのではないかと思って、ヤモリを嫌う人も多くいます。

おまけに、キュキュキュキュキューと鳴くその声は慣れない人にとっては少し気味悪く感じることもあるでしょう。このホテルに泊まっているその日本人もそんなうちの一人で、部屋の中のヤモリを見て気味悪く思い、また鳴き声をうるさく感じていました。実はその部屋に住んでいたヤモリはオスのヤン君と

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

メスのピーコという若い夫婦のヤモリでした。二匹はたいへん仲良しで、毎晩、部屋の天井や壁をキュキュキュキュキューと鳴きながら楽しそうに動き回っていました。ヤモリは手と足の指の先が細いひものようにわかれていて、その細いひものような指先でどこにでも吸い付くことができるのです。ところがその日本人は鳴き声がうるさいのと、気持ちの悪い姿をした動物が同じ部屋の中にいるのを見て、殺してしまおうと考えました。彼はある晩、ヤン君が天井を歩いているのを見て、蚊を殺す殺虫剤の大きなスプレーを机の下から取り出して、ヤン君に向かってシュウッと勢いよく吹きかけました。ヤン君はびっくりして急いで逃げ出しましたが、真っ白な天井には隠れるところがありません。なおもその日本人はヤン君めがけてシュワッ、シュワッと激しくスプレーをかけ続けましたので、ヤン君は　とうとう天井からポトリと床に落ちてしまいました。

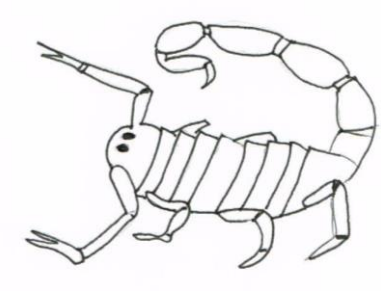
するとその日本人は、今度はヤン君の上から何度も何度もスプレーを吹きかけましたので、とうとうヤン君は苦しくて動けなくなってしまいました。ところがその日本人はなおもその上からスプレーをかけ続けましたので、ヤン君はスプレーの泡で真っ白になって、とうとう動かなくなりました。上から見ると、なんだか細長い白い泡のかたまりがそこに横たわっているようでした。その日本人は、これでヤモリは死んだと思い、ドアを開けて廊下にヤン君を放り出し、ドアをピシャリと閉めました。そして朝早く、掃除のおばさんが来て、その死んでいるヤモリを塵取りの中に入れ、庭の芝生の上に捨てました。

　それから何時間か経って、すっかり夜が明けて周りが明るくなりました。ところが死んでいると思ったヤモリのヤン君は、手と足をぴくぴくと少し動かし、だんだん体を動かすことができるようになってきました。実は死んだはずのヤン君はまだ死んでなく、生きていたのです。そしてヤン君に少し元気が出てきたとき、自分のことよりもピーコのことが気になり始めました。ピーコはどうしているのだろうか、一人で淋しくヤン君のことを探しているのだろうか、と心配になり、会いたくて、会いたくてたまらなくなりました。
しかしヤン君の体には殺虫剤のスプレーがいっぱいかけられ、その殺虫剤をいっぱい吸い込んでしまったので、神経がマヒしてしまい、思うように体を動かすことはできません。前のように壁や柱をかけ登って、廊下や天井を伝って、もと住んでいた部屋に戻ることはできません。あんなに元気に走り回っていたヤン君も、今は右の前足が少し動くだけでした。それでもヤン君はピーコのことが心配で、ピーコに会いたくて、動く一本の前足だけで少しずつ体を引きずって、もと住んでいた部屋の方に向かって動き出しました。

　ヤン君は庭の芝生を伝ってもと居た部屋の窓の下に行こうとしました。けれども、そこまでは１００メートルくらいあり、マヒした一本の足だけでは思うように進みません。少し行くと、すぐ前に大きな木の切り株がありました。元気なときならそんなものを乗り越えるのはへっちゃらだし、気の株を避けて横を通ってゆくことも簡単にできたのですが、今では切り株一つを避けることも大変です。でも何とか時間を

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

かけて切り株の横を通って、前に進むことができました。ところが、今度は前を見ると少し先に蛇がいるではありませんか。もし見つかったら、あっという間に飲み込まれてしまいます。元気な時なら蛇よりもはるかに速く走ることができたので、蛇など怖くもありませんでしたが、今は違います。見つかったら最後です。ヤン君は芝生の中にできるだけ体を低くして隠れました。蛇はヤン君に気が付いていない様子でしたが、だんだんとこちらの方に近づいてきます。ヤン君はもうだめだと思い、目をつぶって草の中に潜るように体を低くしました。蛇はヤン君を棒きれかなにかと思ったのか、何もせずにすぐ横を通り過ぎてゆきました。ヤン君はほっとしました。そして再び、体を引きずって、もと住んでいた部屋の窓の方に向かって進み始めました。ところが上を見上げると、木の枝には鳩よりも少し小さい、焦げ茶色と黒色の混じった、恐ろしそうな鳥がピイピイと声を出して周りの獲物を探していました。ヤン君は見つからないように、前の時と同じように芝生の中に深く体を伏せて、その鳥がどこかに飛んでいくのを待ちました。そして再び前足一本だけで体を引きずって前へ前へと進みました。ところが今度はサソリと出くわしました。サソリは１０センチくらいですが、両手に大きなはさみが付いていて、それで獲物を挟み、お尻についている毒針を獲物に突き刺して、毒で獲物を殺し食べてしまう恐ろしい虫です。人間ですらサソリを見ると逃げてゆきます。サソリにさされたら死んでしまうこともあるからです。そのサソリを見てヤン君は恐ろしさのあまり動けなくなってしまいました。すると、そのサソリはヤン君の歩き方がおかしなのを見てヤン君のそばに来て「お前はどうして一本の足しか動かないのだ？そしてどこへ行くのだ？」と聞きました。ヤン君は今までのことを全部話し、ピーコに会いに行くのだと言いました。そのサソリはサッ君という名前で、心の優しいサソリでしたので、ヤン君のことを可哀そうに思い、「それでは僕がお前をその部屋の前まで連れて行ってやろう」と言って、ヤン君が歩くのを助けてくれました。途中で急な坂がありましたが、サッ君は前から自分のはさみでヤン君をしっかりつかみ、引っ張ってくれたので、ヤン君はその坂を上ることができました。また途中で怖い動物や虫に出会っても、サソリがそばにいるのを見て、みんな怖がって逃げてゆきました。そのようにして、何日かたってやっともと住んでいた部屋の窓の下にたどり着くことができました。ヤン君はサソリのサッ君に「本当にありがとう。おかげでここまでたどり着くことができました。」とお礼を言い、サッ君は「それでは元気でね。」と言って帰ってゆきました。



サソリのサッ君

ヤン君は疲れ果てていましたが、それでもうれしくてうれしくて、思いっきり「ピーコ」と叫ぼうとしました。ところが、何度声を出そうとしても声が出ません。蚊の鳴くような小さな「ピーコ」、と呼ぶ声しか出ません。殺虫スプレーによって喉の神経までがやられてマヒしてしまったのです。これでは閉まった窓ガラスの中にいるピーコには聞こえるはずがありません。それでもヤン君は必死に「ピーコ、ピーコ」と叫び続けました。もう３０分も叫び続けたでしょうか。疲れ果てたヤン君は、もう声も出なくなってしまいました。その時ヤン君は急に悲しくなって、涙がぽろぽろと流れ出しました。そして神様に心の中で言いました。「神様、私は何も悪いことをしていないのに、なぜこのような目に合わなけ

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

ればいけないのでしょうか？人にかみついたり、人間の食べ物を取ったり、またばい菌をまき散らしたりしていません。ただキュキュキュ、キュキュキュと鳴いて部屋の中を動き回っていただけです。その声だって、空の鳥の鳴き声とあまり変わりません。私を知らない人は、私の声を鳥の声と間違うほどです。ただ、人間は私の姿、形、体の色や模様が気持ち悪いと言って私を殺そうとしました。そしてこんな体にしてしまいました。もう私はいつ死んでもかまいません。でもピーコが心配です。元気でいるのでしょうか？私がいなくなって寂しがっていないでしょうか？いつかまた人間に殺されてしまうのでしょうか？」ヤン君の目からは次から次へと大粒の涙が流れ出て止まりません。そしてヤン君は最後に言いました。「ピーコのことが心配で心配でたまりません。会いたくて会いたくてたまりません。どうか死ぬ前に一度でいいから会わせてください。」

一方、その日本人の部屋では、ヤン君がいなくなってからピーコの鳴き声はだんだん小さくなってゆきました。そしてとうとう聞こえなくなってしまいました。するとその日本人は少し寂しい気持ちになりました。そしてある日、ピーコが洗面台の下にいるのを見つけて殺してしまおうかと思いましたが、かわいそうに思い、殺すのは止めて窓から外の庭に出してやりました。

庭の芝生の上で泣きながら神様とお話をしていたヤン君に、神様はゆっくりと空から大きな手を降ろして言いました。「おいで、私の手の上に乗りなさい。私はお前をもう誰からもいじめられない私の国に連れて行ってあげよう。そこではみんなが仲良く幸せに暮らしているのだよ。」そういって神様はヤン君をそっと神様の手の上に乗せました。その手は分厚くて大きく、庭の芝生がほとんど隠れてしまうくらいでした。そして神様のもう一方の手をヤン君の乗っている手にくっつけました。神様の二つの手のひらの横と横とがぴったりとくっつき合ったのです。するとどうでしょう。もう一方の手のひらの上にはピーコが乗っているではありませんか。二匹はびっくりして、そして大喜びでピーコはヤン君が乗っている手のひらの方へ飛び移ってきました。二匹は抱き合って神様に言いました。「神様ありがとう。私たちはこうしてまた一緒になることができました。このことは一生忘れません。」神様は少し寂しそうな顔をして、「私は苦しんでいる人間や生き物を見て、可愛そうに思い何度も何度も助けてきた。しかし私にお礼を言うのはほんの少しの者だけだ。みんなすぐに私のことを忘れてしまう。」と言いました。でも二匹が抱き合って喜んでいる姿を見て、神様もうれしくなって、にっこりと笑って、「さあ、今から私の国に連れて行ってあげよう。そこは殺し合いもいじめも、憎しみ合いも無いところだよ。」そう言って神様は二匹を手のひらに乗せ、大空を高く、高く天国へと昇ってゆきました。

おわり

神様の大きな手が下りてきた広い芝生のお庭

目次

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved

《 編 集 後 記 》

美しく紅葉した落ち葉を踏みしめながら想いました。一年は何と早く過ぎてゆくのでしょうと。いつの間にか「クリスマス号」なのですね。広報部の井本洋子さんが七月に、松田明美さんが九月に天の国に相次いで召されました。寂しいです。どうぞ天の国で私共のためにお祈り下さいますように。

A.H.

与えられる数々の試練につい感謝も忘れ、やり切れない思いが溢れることも。
そんな時、教会に来ると慈愛に満ちた方々が迎えてくださり、故・渡辺和子シスターが著書で紹介されていた「ほほえみを忘れた人ほどそれを必要としている人はいないのだから」はその通りだと実感。私もこのような年齢の重ね方がしたいと切に思います。
日々の仕事や生活を通して、少しでも神様の愛を伝える「小さき鉛筆」の先の粉になることができますように。

T.Y.

教会案内

ミサ

主日ミサ	日曜日	9:30
	第１・第３土曜日 スペイン語	19:00
週日ミサ	火・金曜日	9:30

講座

信仰講座（Fr.傘木）	Fr.傘木担当日曜日	10:50
信仰の分かち合い	第２・第４日曜日	11:00
聖書の集い（Fr.ｴﾏﾆｭｴﾙ平日ﾐｻ担当週）	金曜日	10:15
Come & See	第４土曜日	15:00
教会学校	第１・第３土曜日 対象：小学１年生～６年生	14:00-16:00
評議会	第３日曜日	11:00
野宿者支援炊出し	第１土曜日 （住吉教会集合）	9:30

「すみよし」第203号

発行日	2017年12月24日
発行責任者	エマニュエル神父 コンスルタ神父
編集・印刷・発行	広報チーム
発行所	神戸市東灘区住吉宮町2-18-23 カトリック住吉教会
TEL	078-851-2756
FAX	078-842-3380

http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp

Copyright © 2017 Sumiyoshi Catholic Church, All rights reserved